

平成 31 年 2 月 16 日

芦屋市企画部市民参画課
課長 浅野 令子 様

(あしや市民活動センター指定管理者)
特定非営利活動法人あしや NPO センター
事務局長 橋野 浩美

実施報告

- 1 事業名：施設等のボランティア受け入れ講座
- 2 実施日：平成 30 年 4 月 1 日～平成 31 年 1 月 31 日
- 3 担当：奈良 雅美
- 4 相談件数：61 件（全相談件数の 15.9%）内訪問相談 9 件
- 5 目的：初心者も参加しやすいプログラムの作り方、活動を継続しやすい受け入れの在り方など、ボランティアマネジメントのコツを学んでもらう。
- 6 事案の傾向：

講座という形は施設職員が集まれる時間が難しいとのことで、訪問相談の形で対応した。

事案の傾向として、ボランティアと受け入れ施設がつながる上でのハードルの存在を指摘できる。受け入れる側は、ボランティア受け入れの経験知が少ない、受け入れ担当がボランティアマネジメントの知識が十分ではない（いうまでもなく、本務は別にありあくまでマネジメントは兼務）、ボランティア希望者も活動の初心者である、（社会福祉協議会のボランティアセンターから対応が難しいと言われている）などの課題である。

ボランティアが来なくなっても、ボランティアとは「そんなもの」（自由、来る来ないは不確定で、責任がないなど）と受け止めていけば、受け入れ担当者自身がマネジメントのありようを振り返ることはないかも知れない。

別の側面として、介護予防の観点から高齢者の地域支え合いの中で推奨されるボランティア活動がある。地域貢献が高齢者の生きがいとなる点は、ボランティア活動のポイント制度も同じ文脈で理解できる。
- 7 コーディネーターのアウトリーチによる効果

外部のコーディネーターが介在する効果としては、3 つの側面から次のような点が挙げられるだろう。

 - 1) 受け入れ施設側
 - ・施設の担当者（コーディネーター）を支える（孤立させない）
 - ・受け入れ態勢を補助する
 - ・施設担当者に具体的な助言（知識・ワザ）を提供する（伝える）

2) ボランティア側

- ・活動する側の思いやニーズを代弁する
- ・ボランティアをフォローしやすい

3) 受け入れ側とボランティア側の間

- ・目的、認識、情報、などギャップを埋める
- ・対等につなぐ

但し、上記3点の前提として、市民活動センターのコーディネーターが双方を知っている（ある程度のラポールが築かれている）ことは重要であろう。

ボランティアはしなければならないものではないし、大抵の場合ボランティアを受け入れる側も絶対ボランティアに依頼しなければならないことはない。双方をつなぎとめるものは細い糸のようなものである。しかし、ボランティアの活動はどのような人も何らかの形で社会を主体的に支える担い手になるための土壌である。施設での活動はその受け皿の1つだ。

自分からつながることができる人ばかりではなく、また受け入れ側もマネジメントがうまく回っている組織ばかりではない。一般に7割の人はボランティア未経験であると言われる現状を鑑みても、市民活動支援のコーディネーターとしては、半歩前に出たコーディネーションによって積極的に市民社会の醸成を促していくべきではないかと考えられる。受け入れ側も、ハード面の準備、スタッフ間の意識醸成の状況、組織幹部の考え方において、様々である。こちら側が出向くことで、臨機応変に支援的に介在できるメリットもある。

ボランティアの募集から受け入れ、活動のスーパーバイズなど、一連のボランティアマネジメントを、本来はそれぞれの施設（や団体）でできるのが一つの理想かもしれないが、現実には体制的に厳しい。地域の市民活動センター（中間支援組織）が、積極的にサポートに入ることは、これからも積極的に必要な場合もあるのではないと思われる。

以上